
雨傘さして、めぐり逢い《銀魂・沖神》

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨傘さして、めぐり逢い《銀魂・沖神》

【Nコード】

N4437T

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

ホントは、両思い。なのに素直になれずに、毎日毎日片思い…。想いを伝えられなくて、すれ違っただけだけど、心の底では一緒の2人。鈍感な沖田と繊細な神楽の、ちょっとほのぼのする初恋話。少々、DOESの『曇天』を意識して書きました。

巻・沖田編（前書き）

沖田と神楽のそれぞれの目線から描いた、ほのぼの沖神です。
急に思いついて書きました。

注意！！

沖神CPです。

ツンデレです。よってキャラも崩壊しています。

文は、相変わらずで分かりにくいかもしれませんが…。

以上が大丈夫な方は、どうぞ。

壱・沖田編

その日は昼間から、空が鉛色の重い雲ですっかり覆われた、不吉な曇天だった。

けれど、そんな暗く澱んだ空気を気にも留めず、口笛を吹きながら飄々と道を歩く人物がいる。

真選組一番隊隊長、沖田総悟だ。

彼はいつも通り、市中見回りをしている。

と見せかけ、実は土方の目を盗んでサボっていた。ただ当てもなくぶらぶらと歩きながら、脳内で土方を殺しては1人で楽しんでいるのだ。

公園の方まで来た時、彼は一番会いたくなくて、一番会いたい人物に出会った。

「よう、チャイナ」

そう、声をかけてみる。

喜びにはやる気持ちを押さえ、なるべくぶっきらぼつに。

「あ。…こんの、サドやるー」

神楽は、敵意をむき出しにした目で沖田を見る。

(…まったく。参ったな、コイツには。…俺の事、本気で嫌ってやがるのか)

心の中で苦笑する沖田。とはいえ神楽は、そんな彼の気持ちに気付くことは無く。

「やんのか？コルア」

可愛い瞳で沖田を睨みながら、傘に手を掛ける。

「上等だぜ、チャイナ」

沖田も、刀の柄を握り締めた。

…それから数分間、2人は言い合い、罵り合い、殴り合い、蹴り合い、そして殺り合った。

けれど、今日も決着はつかない。

結局、2人は1つのベンチになるべく離れて座り、休憩した。

「大したことないアルな、DS隊長」

「オメーもな、チャイナ娘」

互いに、トゲのある嫌みを交わす。

(…可愛くねえ奴。いや、ここは俺が素直になって…)

「そっぴや、チャイナ」

沖田は、ぼつと話しかける。体はそっぽを向いたまま、視線だけで神楽を捉えて。

「こんな天気の良い日に、なんで公園に」

すると神楽は、少し笑った。

「晴れの日、外出するにも傘があるアル。…でも、たまには傘ささないで、自然を味わいたいネ」

「…そーか」

湿った、不快な風が2人の間を吹き抜ける。

(こんな日にしか、コイツは「外」を楽しめねーのか)

沖田は、神楽の事を少しだけ不憫に思った。

けれど神楽は、まるで花が咲いているかのような笑顔で立ち上がった。

「じゃ、帰るネ」

「おう、じゃーな」

沖田は神楽を何気なく見送る。そして彼女の影が公園から消えた時、あることに気付いた。

「…チャイナの奴、傘、忘れてやがる」

そして次の瞬間、ポツリ、と雫が沖田の額を打った。

「雨だ…」

まばらに音を奏でていた雨は、だんだんリズムカルになり、すぐに大降りとなる。

沖田は神楽の傘を持って、屯所へ駆けもどった。

そして自室にその傘をしまいこみ、何を思ったのか、代わりに自分のビニール傘を持って屯所の前に立った。

ほどなく、神楽がやってくる。

「沖田あ！私の傘、知らないアルか!？」

雨にぬれてすっかり冷たくなった体を自分の腕で抱きながら、神楽は沖田に問う。

けれどその質問に、沖田はあろうことが、

「知らねーな」

と答えた。

「え…」

絶望的な表情の神楽に、沖田は自分のビニール傘を差し出した。

「ほらよ。俺が万事屋まで送って行っ」

「ありがとネ」

彼が「送って行ってやる」と言い終わる前に、神楽は彼の手から

傘をもぎ取り、万事屋の方へ走って行ってしまった。彼の方を振り向きもしないで。

「……」

後に残されたは、傘を失い、ずぶ濡れの沖田ただ一人。

(ひでえ奴でさ)

運が良ければ相々傘ができるかもしれないと思っていたが、とんだ誤算だったようだ。

(ま、いいか。明日あたり、アイツの傘を返しに行こう)

そう思ったとたん、沖田の心の中の雲は晴れた。

(アイツの傘を隠すなんて、そんなことする必要なかった。素直な自分でいこう)

明日も、きっと神楽に会える。

今の俺は、それでいい。

「また明日でさア、神楽」

一人ぼそつと呟いてから、気恥ずかしくて彼は口を手でぬぐった。

貳・神楽編

その日は昼間から、空が鉛色の重い雲ですっかり覆われた、不吉な曇天だった。

けれど、そんな暗く澱んだ空気を気にも留めず、スキップをしながら楽しげに道を行く人物がいる。

万事屋銀ちゃんの紅一点、神楽だ。

彼女はいつも通り、酢昆布を食べながら、ただ当てもなくぶらぶらと歩いている。

公園の方まで来た時、彼女は一番会いたくなくて、一番会いたい人物に声を掛けられた。

「よう、チャイナ」

不機嫌そうなその声の主は、真選組一番隊隊長、沖田総悟。

（逢っていきなり、その呼び方は何アルかつ！！）

「あ。…こんの、サドやるー」

神楽は、沖田を睨んでやった。

（…たまには、親切に話しかけてもらいたいネ）

そう思ったけれど、そんな本音言えるはずもなく。

代わりに、行き場の無い気持ちを怒りにしてぶつける。

「やんのか？コルア」

傘を握って凄みをきかせると、

「上等だぜ、チャイナ」

と沖田も構える。

…それから数分間、沖田の事を好きになってしまった自分の気持ちをどこかに振り払うように、神楽は激しく傘を振るった。

けれど、今日も決着はつかない。

沖田がベンチに座ったので、神楽もその同じベンチに、なるべく間を開けて座った。近くに行きたい、けれど行けない自分に腹を立てながら。

「大したことないアルな、ドS隊長」
そう言っつてやると、

「オメーもな、チャイナ娘」
と、腹黒さ100%の言葉が返ってきた。

（いつもいつも、沖田は上から目線。私の事見下してるアル。つまんないネ）

神楽がもう一言嫌みを言っただろうと思った時、

「そっいや、チャイナ」

沖田が話しかけてきた。

相変わらず、そっぽを向いたまま。

「こんな天気の良い日に、何で公園に」

横目で神楽を見て、ちよつとムスツとしながら彼はそう訊く。

でも、その口調にはどこかやさしい感情が含まれている事に、神楽は気づいた。

だから、自然に彼女の顔はほころぶ。

「晴れの日、外出するにも傘がいるアル。…でも、たまには傘ささないで、自然を味わいたいネ」

素直に、そう答えた。

すると沖田は黙った。何か考えるように、じっと一点を見つめながら。

(…何アルか、この雰囲気…何か、暗い…)

沈黙の続く2人の間を、湿り気を含んだ風が駆け抜ける。すぐにも雨が降ることを告げるような、重い風だ。

その時、神楽の頭に妙案が浮かんだ。

思わず、にやり笑いが顔に広がる。

「じゃ、帰るネ」
そう言って立ち上がる。

「おう、じゃーな」

沖田の声を背中で受けながら、神楽は公園を後にした。

わざと、傘を持たないで。

(傘を忘れれば、きっと沖田が届けに来てくれる。…そうすれば、ぶっきらぼうで優しい沖田に会える)

足取り軽く、神楽は家路につく。

やがて、雨が降り出した。

ぽつぽつと体を打っていたその雨は、すぐに激しくなり、背中に冷たく突き刺さる。

…でも、沖田は追いかけてこなかった。

(何で。何で、来てくれないネ…)

雨の中、神楽は冷えていく自分の体を腕でかばいながら、一人心細く道に行く。とぼとぼと歩いていると、いつの間にか屯所の前

に来ていた。

門の所には…沖田がいる。

ビニール傘を持ってポケッと立っている彼が、正直恨めしかった。しかし、そんな事をどうこう言っている場合ではない。このままでは、風邪をひいてしまう。

「沖田あ！私の傘、知らないアルか！？」

そう尋ねてみたが、返されたのは、

「知らねーな」

という、つつけんどんな答え。

心配してくれるでもなく、詫びるでもなく…。

(やっぱり。私の事なんて…)

とてもとても残念で、悲しかった。

そして、なにやら小声で聞き取れない言葉とともに、無造作に自分の前に差し出された傘を引っつかみ、視線も合わさずに礼だけ言い残し、逃げるようにしてその場を去った。

「沖田なんて。沖田なんて…」

沖田なんて、大嫌い。

…うつん、好き。

だから。

(明日晴れたら、この傘を返しに行こう。そして、勝手に持って行くっちゃってごめんって、謝ろう)

そう思ったとたん、神楽の心の中の雲は晴れた。

(傘を忘れるなんて、あんな演技しなくてよかった。素直な自分でいい)

明日も、きっと沖田に会える。

…今の私は、それでいい。

「また明日アル、総悟」

万事屋への道すがら、一人ぼそっと呟いてから、気恥ずかしくて彼女は口を手でぬぐった。

式・神楽編（後書き）

はい。

えー…これで良かったんだかどうだか…。

文章力も進歩なしです（泣）

後日談はそのうち書く…かもしれないです。

感想、アドバイス等ありましたら、よろしく願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4437t/>

雨傘さして、めぐり逢い《銀魂・沖神》

2011年5月27日14時56分発行